

お花摘みは、私たちのためじゃないんですよ。皆の大好きな、岡さんの大四郎ちゃんのためなの。今日、神戸までお見舞いに行こうと思ってるんですよ。」子どもたちは、真面目な表情になりました。「大四郎ちゃん、とっても悪いの？」栄子が尋ねました。

先生がうなずくと、さっと心配の色が浮かびました。岡さんと足の不自由な幼い子どもたちの顔に、大四郎の話は、比白が知っていました。大四郎には、お姉さんが二人とお兄さんが一人いて、最近まで、お父さんが牧師をしていた小さな町の教会に住んでお姉さんやお兄さんが学校に行きました。ある日、教会堂の上にある住居の居夫とお茶を飲みながら、っている間、岡さんは、次の日曜日の礼拝で歌う賛美歌を選んでいました。大四郎は気持ち良さそ、つに、岡さんの背中におんぶされていました。天気の良い、とても幸せな一日でした。